

運命論者だった大平さん

阿部 穆

大平総理は運命論者であつた。ただ、普通の運命論者と違ふところは、運命に身をまかせて、ことのおもむくままに従ふというのではなく、その状況下ではぎりぎりまでベストを尽して天命を待つ、というタイプであつた。池田政権最後の改造人事の際に、外務大臣から幹事長にという事前の話が土壇場で変わつて、筆頭副幹事長に降格となつた時、佐藤政権で通産大臣を務めていて、改造人事のフタを開けてみたら更迭された時、いずれもただ一言「なにことも運命だよ」と淡々としていたものである。

四十七年夏、ともにポスト佐藤を争つた田中、三木、福田の三氏が先に相ついで総理総裁の座についていくのをじつと耐え、むしろそれぞれの政権を支える役回りを黙々と果たしたのも「めぐり合わせさ」という割り切り方と、モットーである『菜根譚』の「一步を譲るを高きと為す」の心構えからだつたであらう。

いまにして思えば、運命論者である大平さんがその本領を發揮し、文字通り身命を賭してなしたのが、日中国交正常化だつた。四十七年九月の正常化交渉の訪中を間近に控えたある日、山形三区の補欠選挙で出馬した黒金泰美氏を応援するため、米沢に向かう大平外務大臣に同行したことがあつた。

列車が福島を出て間もなく、板谷峠にさしかかると、大平さんは急に真顔になり「キミと旅をするのもこれが最後かもしれない。ボクは（反対勢力に）いつ殺されるかわからないのだ。もし天がボクを助けて下さるなら、この交渉は成功するだろう」と語つて、移りゆく窓外の山々の景色に目を向けたのだつた。政治家としてのきびし

い使命感と信念にあふれた大平さんのこのことばに、私はハツと胸をつかれる思いがしたのであった。

幹事長でありながら福田総理と総裁の座を争った五十三年秋の総裁公選の予備選開票前夜も「やるだけやった。あとは神のみぞ知るだね」といって、気をもむ側近の人たちを「まあ、そう心配するなよ」と逆に激励していたシーンもあった。

晩年、大平総理は好んで「進退問天、栄辱従命」という書をかかれた。直感的に自らの進退、栄辱は天のおぼしめしのうちにあることをヒシヒシと感じていたのであろう。昨年五月、自らが断行した衆参両院同時選挙が、総理のまさに「栄辱」をかけた戦いであることをよく知っておられたように思う。

六月十二日、総理が亡くなった日に、私はサンケイ新聞に「大平首相を偲ぶ」の一文を書き「天は大平首相を呼び返したが、首相が 栄辱 をかけた同時選挙の投票は十日あとにある」としめくくった。同時選挙は亡き総理の熱望された通り自民党の圧勝に終わり、政局の安定はもたらされた。

それから約三カ月後の九月十九日、大平邸で埋葬に先立つお別れの逝去百日記念式があった。祭壇にかかげられた総理の遺影を拝むとき、私は「おとうちゃん、あなたはとうとう天に呼ばれてしまいましたね。でも、天は、選挙があなたの望んだ通りになることをご存じだったから、あなたを呼んだのでしょう」と心のなかで語りかけた。

やがて聖歌隊の合唱が始まった。「わずらいおおき 世の中にも きよきみたまの むれにிரいて こころやすく 主のうたげ みまねきつくる そのたのしさ……」 その歌声をききながら私は、とめどなくあふれてくる涙をおさえられなかった。

(サンケイ新聞政治部長)